

---

# Star Stone

こちよ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Star Stone

### 【Nコード】

N8596F

### 【作者名】

こちよ

### 【あらすじ】

主人公シルビアは、時計守の一族の19歳。稀有な容姿をしており、それを隠すのにフード付きケープが手放せない。目立たず、ひっそりと暮らしていた彼女だったが、、、ズレた騎士、ナルシストな姫、皮肉屋封印士etc。最初はシリアスですが、コメディも入れていきます。

いつのはじまり。 第1話（前書き）

ド素人の小説です。暖かい目でみてやってくださいませ・・・。

## いつのはじまり。 第1話

あるところにディムスター王国、という国が存在した。  
住人は皆多少の魔力を有しており、魔法国家として周囲の国々からも一目置かれてきた。

王都は国の中央部に位置し、名をミッドゴールドディムといい、他に副都と呼ばれる大きな6つの都市があった。

副都の1つに、リバーポロンがあった。その都市には、巨大な時計塔が建っていた。言い伝えによると、その時計塔はリバーポロンの土地に人が住み始める前、はるか古に建てられたそうだ。

今から語るのは、その時計塔から始まる、あるお話……

### 《主人公紹介》

名は、シルビア。童顔な19才の女の子。

生まれも育ちもリバーポロン。家族は、父親であるマルス、兄のフアリオの2人。

彼女達は、代々時計塔の横にある屋敷に住み、時計塔を管理していたので『時計守』と呼ばれていた。

魔力そこそこ、趣味は読書、  
特技は料理・洗濯など家事全般、ないたって凡人・・・  
と自分では思っている。

ただし理由があつて、1年中灰色のフードを被っており、部屋にこもって毒物・魔物の研究をしている、といういわゆるヒッキーな暮らしを今までしてきた。

ある、友人がつけたあだ名は、「灰かぶりのジル」。

-----  
-----

人の運命なんて、前触れもなく変わるものだ。  
その変化が自分にとって良いものか否か、その時は判断できない。だから、皆一喜一憂を繰り返しながら生きている。

ある昏下がり、この物語の主人公シルビアは時計塔の中にいた。



――  
――  
事の発端は、時計守の父親マルスだった。  
マルスは、その日の朝、突然シルビアに、

「悪いんだが、今から時計塔の最上階に行ってくれないか??  
塔の最上階には、‘スターストーン’という特殊な石があるんだ  
が・・・」

その様子を見てきてほしいんだ。」

と、仕事を頼んだのだ。

だが、シルビアは時計塔には今までノータッチ。何故なら代々時計  
塔の管理は、男子がやるものだったからだ。女である自分が仕事を  
頼まれるなんて思ってもいなかったの、彼女はとても驚いた。

「え?! 私が???! 私、女だし、時計塔の事全くわからないわ  
・・・」

と、シルビアは父に答えた。

すると、マルスは彼女に、

「いや、まあ、なんだ。今どき、男女平等が世間で流行っているし、  
大丈夫さ!」

と軽く言う。

「そういう問題・・・？まず、塔の中に入るの初めてよ。大丈夫かしら・・・。」

と、心配したシルビアに、

「時計塔の中は、何も心配はないさ。危険はない。魔物も出ないしな。」

ちなみに魔法は使え・・・まあ、多少使いづらいかもしれん。」

と、マルス。

「そうなの？ で、スターストーンて何なの？？」

「そうそう、スターストーンの事だがな、ま、いわゆる時計塔の核だな。」

それが時計なんかを動かしているんだが・・・

とりあえず、恐ろしいほど金色に輝いているんだ。あれこれいつでも、あれだ、まず様子を 見てきてごらん。」

と、マルスはやたら大雑把な説明をしたのだった。

当然シルビアは、やたら適当な説明ね・・・なんて思った。

しかし、マルスが危険もないし早く行け・・・と急かすものだから、時計塔へ軽い気持ちで向かったのだった。

-----  
-----  
-----

カツカツカツ・・・タッタッタツ・・・

カツカツ・・・

軽く仕事頼まれちゃって、まさかこんなことになるなんて・・・。塔に入った時はよかったんだけどなあ。徒歩で階段昇るっていうのは、本当にキツイ・・・。

息が切れてきたシルビアは、階段の踊り場で一休みした。予想もしなかった事態なので、苦笑が漏れてしまう。

-----  
-----



## 第2話

シルビアが昇っている時計塔は、遙か古より建っている重厚な石造りであった。外壁は、巨大な石で精密に組まれてあり、隙間などは全くない。

壁の高い部分まで蔦がからみ、歴史を感じさせた。ただ外から見ると分には、窓が無く閉鎖的な雰囲気であった。

そのため、塔の中は、暗くてホコリまみれじゃないかしら・・・なんて本気で思っていたのだが。

いざ、時計塔の中に入ってみると。壁に小さな天窓でもあるらしく、中は程ほどに明るかった。内壁には古代模様が施してあった。近づいてよく見ると、模様の1つ1つは細かい魔方陣のようだった。

外からの光が、魔方陣に反射してとても幻想的だ。しかも光とともに、籠められた魔力が微量ながらも空中に拡散している。感覚的に塔内が魔力で満ちているのが分かった。

塔内がこんな風になっていたなんて・・・。全然想像してなかったわ。ここは今でも古の時が流れてるみたい・・・。と、シルビアは感動したのだった。

しばし1階でその光景を堪能した。そして目の前の螺旋階段に立ち、呪文を唱えた。呪文は、ずばり、楽しんで階段が昇れるもの。

父さんは、塔内は魔法が使いづらいつて言ってたけど、大丈夫よね、たぶん！ よおし・・・一気に最上階まで昇るわよ！！

「 シュウエーバン ！！ \* \* 浮上 \* \* 」

.....

「 あれ?? ミスった!? もう一回!! シュウエーバ

ン!! 」

.....  
虚しく声が階段に響く。

「 .....まさか、魔力の無効化.....?? うそ..... 」

そう、シルビアにとって悲劇だったのは、塔の内部では魔法が使えないことだった。父親に最上階まで行くように言われた時、詳しく聞かなかつたのが悪いのだが。

やばいなあ・・・いや、さっきの魔法が無理でも、違う魔法だったらいけるかも！色々試してみよう・・・よし、これはどうだ!!

「 スプリングン!! \* \* 跳躍 \* \* 」

.....

「 ゲネーゼン ！！ \* \* 疲労回復 \* \* 」

「 タンジエン!? \* \* 踊る \* \* 」

。。。。

『うう。。。。』

やっぱり、ダメか。。。塔内は、全く魔法が使えないのね。。。つまり、らせん階段を徒歩で昇らないといけない。。。うわあ。これは、大誤算だわ。。。。

しばし、固まる。

が。

んー。ま、固まっても仕方ないわね！せっかく時計塔の中に入ったしね、最上階までの階段筋トレ、やってやるうじゃない！！！！開き直り精神を発動し、1階から地道に階段を昇り始めたのだった。

-----  
-----

そうして、階段の踊り場で一休み、の時に至るのである。

### 第3話

踊り場で数分休んでいると、乱れていた息も整った。

父さんに、詳しく聞かなかった私が甘かったわ。もう、かなり昇ってきたし！やるしかない！！

そう覚悟を決め、また螺旋階段を昇り始めた。

それからかなりの時間がたった。

もう、太ももが上がらない！！限界かも・・・  
そう思い始めた時、

『あ！！！！！！』

ついに最上階に到着したのだ。

『やったわ！！！！！！ついに着いたわ！！！！』

最後の段を気力で昇り、しゃがみ込んで休憩を取った。19年間生きた中で、一番頑張ったのは今日かも・・・なんて思う。

休憩をとっていると、少しずつ疲れがとれてきた。

しかし、とても暑い。久しぶりに運動した体は、まだ火照ったままだった。さらに被ったフードのせいで、暑さが倍増している。

ここには誰もいないしいいや！！さすがに、フードは蒸れるし・・・深く深く被っているフードを取って、汗を拭いた。シルビアの隠されていた、髪や瞳が露わになった。

外から射す冬の冷たく透明な太陽光が、それらを照らし出す。

煌くきらめく。

シルビアの髪は、白銀。

その瞳は、金。

その姿は、女神か、悪魔か。

シルビアは、この姿故その顔をフードで隠し続けていたのだ。

フードとったのは、久しぶりだね。フードのない世界って結構まぶしいのよね。

そう思いながら目を瞑り、火照りを冷ました。

火照りが落ち着いた頃、シルビアは立ち上がって周りを見渡した。と、階段の右横に狭い回廊があるのを見つけた。よろよろしながらも、そちらへ向かう。

1本しか、回廊がないし、ここを進むしかないわね。

筋肉痛になった太ももを手で叩きつつ、シルビアはその回廊を歩き始めた。

幸い回廊は短いもので、少し進むとすぐ行き止まりになった。

そこには扉のようなものがある。

あれが、スターストーンのある所に通じる扉なのかしら……。

扉の傍まで行ってみる。

扉は、高さが3メートルほどあり、中央には、極彩色の魔方陣が描かれていた。

魔方陣に顔を近づけた時、

『つつ……!!』

強い魔力を感じて、一步後ろに下がる。異様な雰囲気を感じたのだ。

『すごい……!すごい力!!こんな魔方陣初めて!!』

体は疲れきっていたが、そんな事も忘れて、魔方陣に見入ってしまった。

幾重にも重なる緻密な線。この1つ1つの線に、どれだけ凄い力が籠ってるんだろう。

陣の構成は詳しくないけど……力は、古より健在ね。

「この部分なんか、すごいわ……どれどれ??」

よく見ようと、シルビアがさらに顔を近づけたその瞬間・

『……っ!!?!?!?』

ピリッと何かを感じて、我に返る。

『あーびっくりしたー!!?!?!』

危ない危ない……また興奮してすっかり警戒心つてものを忘れてたわ。

そうだ、中に入らないと!!

目的を思い出し、冷静になる。そして扉を開けるため、父に教わった門外不出の呪文を唱えた。

『\*\*\*\*\*!!』

唱えた瞬間、扉に描いてある魔法陣が、金色に鋭く光った。

ズズズズズ……

そして、石の扉が音をたてて開いたのだ。

今の魔法は、無効化されなかった……よかった……少し、いや、かなり不安だったので、ほっとする。

呪文は自分が家を出る前、唯一父親が、真面目に教えてくれたもの

だったからだ。魔力無効化の件があるので、父親への不信感が募っている。

恐怖の筋トレをしちゃった恨みは深いわよ……これで、開かなかったら、父さんは血祭りだったわね。

— 安心したところで、シルビアは最上階の広間に入っていた。

広間を歩きながら足元に目をやってみると。

『……うわぁ。これもすごい……。』

床に巨大な魔方陣があったのだ。その魔方陣は、床一面に描かれている。

さっき見た扉の魔方陣に似ているわ。でも規模が桁外れに違う。相当すごい代物だわ……

時計塔って……。実はかなり凄いものなのかしら？

今まで、古い建造物、位にしか思っていなかった、時計塔だが。シ

ルビアには、色々な疑問が沸いてきていた。

まず、時を刻むっていうこと以外に、何か役割がこの塔にはありそうね……。

1階の壁に描かれた魔法陣じみた模様、

最上階の2つの強力な魔方陣、

塔全体の魔法無効化。

いつかの古に、いったい力の有る魔術師何人でもって、このようなものを完成させたんだろうか？

まず彼らが、唯の時計にここまで力をつぎ込むはずがない……

絶対、父さんを‘色々な意味’で問い詰めよう……（怒）

魔方陣の中心を見ると、輝く石を見つけた。

スターストーンだ。石は空中に浮き、ゆっくりと回転している……

『これが……時計塔の核。』

離れた所から、眺めてみた。どうやら石に近づくには、魔方陣の上を歩かなければならぬそうだ。用心しながら魔方陣に近づき、おっかなびつくり足を乗せてみた。

弾じき飛ばされたりしないかしら……怖いけど……やるしかない

！！

『そーつと……。』

よし！大丈夫！』

両足を魔方陣の上に乗せたが、何も起こらなかった。  
ふう。この魔方陣に嫌われたら、ピリツてなるとかじゃ済まないわ  
よね。よかったよかった……。陣の上を歩き、シルビアは石の傍に  
立った。

じゃ、石をよく見ますか。

シルビアは、観察を始めたのだった。

石を数分間見ていたシルビアだが、何故か違和感があった。

『んー……。？』

父さんは、石は金色で素晴らしく輝いている、と言っていたけれど。  
。石の輝きが、鈍い？？というか、どことなく濁っている。まる  
で、いつもフード中にある私の瞳みたい……  
金色といえど、光をあてなければ唯の茶色。  
通常の魔石よりは、力は強大だけど……。床や扉にある魔方陣達の  
方がずつと立派なのは、気のせい？？

『う……ん。ま、いつか。』

違和感はあるけど、これで石も見たし一応輝いてるし……！ 仕事完了……！

てことで、帰ろう……！

シルビアは石の観察を止めた。そして向きを変えると、広間の出口に向かった。

その時

石が

微かに光を落とした

## 来客。 第1話

シルビアが塔の中で格闘していた頃。  
彼女の住む屋敷に1人の来客があった。

その客は慣れた様子で屋敷に入ると、書斎に向かった。扉をノックするが返事はない。もう1度ノックをしてから扉を開けると、扉に背を向けて机に向かうマルスがいた。客は彼に声をかけた。

『お久しぶりです、マルス殿。ただいま参りました。』

声をかけられ、気づいたマルスが客の方に振りむく。

『おおついたか、フィリース！すまん、気付かんかった。』

マルスはフィリースと言う人物を迎えた。そして、そばの椅子に座るように進める。

『ありがとうございます。』

フィリースは軽く頭を下げて椅子に座った。

『早い到着で驚いたよ！ 南のサウスブルームから東北のリバーポロンまでだ、かなりの距離をご苦労だった。一人旅で、何かと大変だっただろう？』

と、フィリースを労うマルスだったが、

『大丈夫です。魔物の数は増えていましたが。独りでしたので、気楽でした。』

と、顔にかかった長めの金髪を手でかき上げ、そつなく答えるフィリス。

たしかに、まったく疲れた感じが無い。金色の髪も旅をしていた割に見事に手入れしてあるようだ。

あいかわらずな様子のフィリスにマルスは苦笑する。

『そ、そう……。君らしいな。まあ、今日の所はゆっくりしてくれ。』

おお、そつだ！君の部屋をどうしようか。思ったより早めの到着だったから、まだ準備が……。後で、シルビアにさせよう。』

『大丈夫です。適当に休みますので。ところで、ジルは今いないんですか？？』

いつもなら、自分が来ると飛んでくる彼女がいない。

『うむ。ちよつと野暮用でな……。』

言葉を濁したマルスに、フィリスは少し眉間に皺を寄せた。

『まさか、外出ですか？ 屋敷に籠もっているはずでは……。』

少しの沈黙の後、マルスは答えた。

『……時計塔に行かせた。』

フィリスはその瞬間、椅子から立ち上がった。

『なぜ?! ……これ以上。これ以上、ジルの負担を増やすおつもりなのか!?!』

そう言ってフィリスはマルスを見つめた。金髪の合い間から見える、その澄んだ翠瞳には明らかに怒りがあった。

フィリスの様子を見て、マルスは目を瞑った。

そして、少し間を開けて尋ねる。

『……フィリス。息子達の話は??』

『……………』

今度は、フィリスが沈黙する番だった。

そして椅子に腰を下ろす。

『まだ……ファリオ殿一向の行方は不明です。』

『そうか。』

そう答えると、マルスはフィリスからまた視線を外し、目を瞑った。

しばし、沈黙が続いた。

『……マルス殿……』

フィリスが何か話そうと、声をかけた。と、それを遮るように、マルスが口を開いた。

『もし。』

フィリスはマルスの次の言葉を待つ。

『もし。娘が時計塔で感づることがあったら。娘も、いつかは関わらざるをえない。始まりが今日でないとしても……。』

それを聞いたフィリスは俯き、何も言わなかった。

また、2人を包む雰囲気は暗くなった時、

バターン！！

どこかで扉が閉まる凄惨な音がした。

『……』

沈黙が破られた二人は、顔を見合わせた。

『どっちら帰ってきたようだな…。』

マルスは呟いた。そしてフィリスに言った。

『おそらく、シルビアも疲れていると思う。今日の所は会わないでくれ。』

フィリスは頷く。そして、

『そうですね。今日は遠慮しておきます。…準備もありますし。』

と、口端を少し上げて笑った。そんなフィリスにマルスは、

『まだやるのか。』

となぜか呆れた顔をしたのだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8596f/>

---

Star Stone

2010年10月20日19時10分発行